いろいろ事件はおきたものの、激闘を終えた「おれたちの大会」。ここから、まだまだ期待のできる展開が待っていたはずなのだが、**どうやら連載終了が決まってしまったらしく**、物語はまさかの**急転直下の展開**を見せる。
実質、漫画「ウォー・クライ」は「おれたちの大会」までで終了したと考えるべきだろう。だが、打ち切りが決まる（？）までの展開をしるす意味でも、そしてかえって打ち切りが決まってからこそ、作者からのメッセージ（←**かなり強烈**）が凝縮されているので、エピローグとしてそれをここにレビューする価値があるだろう。

試合、そしてラグビーを通じてなら満足しあえたはずの‘おれたちの大会’。だが、部活を続ける叶、そして社会人ラグビーに進んだサブであるが、二人ともに空虚感でいっぱいだ。
それは、**浩が結果的に脊髄損傷により下半身不随になってしまった**というのが全ての理由である。
サブは社会人ラグビーにて全力でプレーすることで‘償い’を試みるが、叶は完全に闘志を失ってしまった。練習にも参加せず、伊達が主将代理を務める始末である。

そこへ、冴木監督がやってきた。めずらしくスカートだ。そして、もう監督を引退すると伝えてきた。闘志を失った叶にも、
冴木「もう女のおれが男であるあいつに･･･口出しすることァ、何もねえよ･･･！」
結局、最後のほうはあまりに役に立ちませんでしたね。

浩の見舞いにいく叶だが、浩が元気そうに振舞えば振舞うほど、自責の念にかられる叶。
その夜、一人グラウンドに立ち、苦悶の表情を浮かべていた。
そこへ、一升瓶を片手に持った飲んだくれの男が。しかも、酒をドボドボとグラウンドに垂らしながら叶のところへやってきた。**嫌な予感**。
男「ガキどもにこんないい専用グラウンドとはよおォ！こんな広っぱにゃ･･･ダイコンだって生えやしねえよ！」
神聖なグラウンドを汚され、**男に殴りかかる叶**。だが、あっさり返り討ちに会い、ボコボコにされた。**ただの暴漢**じゃん。

男、叶の頭を踏みつけつつ、
男「ここにゃあ大根もペンペン草も生えねえが、おまえらが男に･･･一人前のラガーに育っていくところだ！！ここの土をコヤシにしてな！」
そして、男は**自分が新監督であることを明かす**。
男「部員が試合で大ケガをし、それを主将として責任を感じて、ラグビーをやる気をなくしとるようだな･･･半人前のくせにカッコつけんじゃねえっ！！ラグビーで死ねたら本望とか言ってたらしいな･･･半人前にしちゃあカッコつけすぎのセリフだぜ！」

そして、さらにまくしたてる。
男「さあ、そこの土を食ってみろっ！！おまえを‘半人前’に育ててきたコヤシだ！！」
と、とんでもないことを言い出した。全然「食う」必要性がわからない。
だが、

叶、食った。お腹を壊さなければいいが。
そういえば、「**叶 M 説**」は既出であるが、この図を見る限りこの男は完全に S である。『ウォー・クライ』12 巻にして、**叶は最高のパートナーをみつけた**ようだ。

その様子を陰から見ていた、蓬莱校長と冴木監督。

それに向かって親指を立てている男だが、**いったい何が‘グー’なのか**。
冴木「もう俺の役目は終わった･･･あとはすべてあの‘兄貴’にまかせるよ･･･校長、叶に伝えてくれや･･･お前は男だぜ！この俺が惚れちまったくらいのな･･･てよ！」
そういえば、冴木さんは本来校長が召集するはずだった監督の妹であった。この男は、冴木兄だったのだ。ここに来て新展開！期待がもてる！**微妙に叶に告白して去っていく妹はそうっとしておこう**。

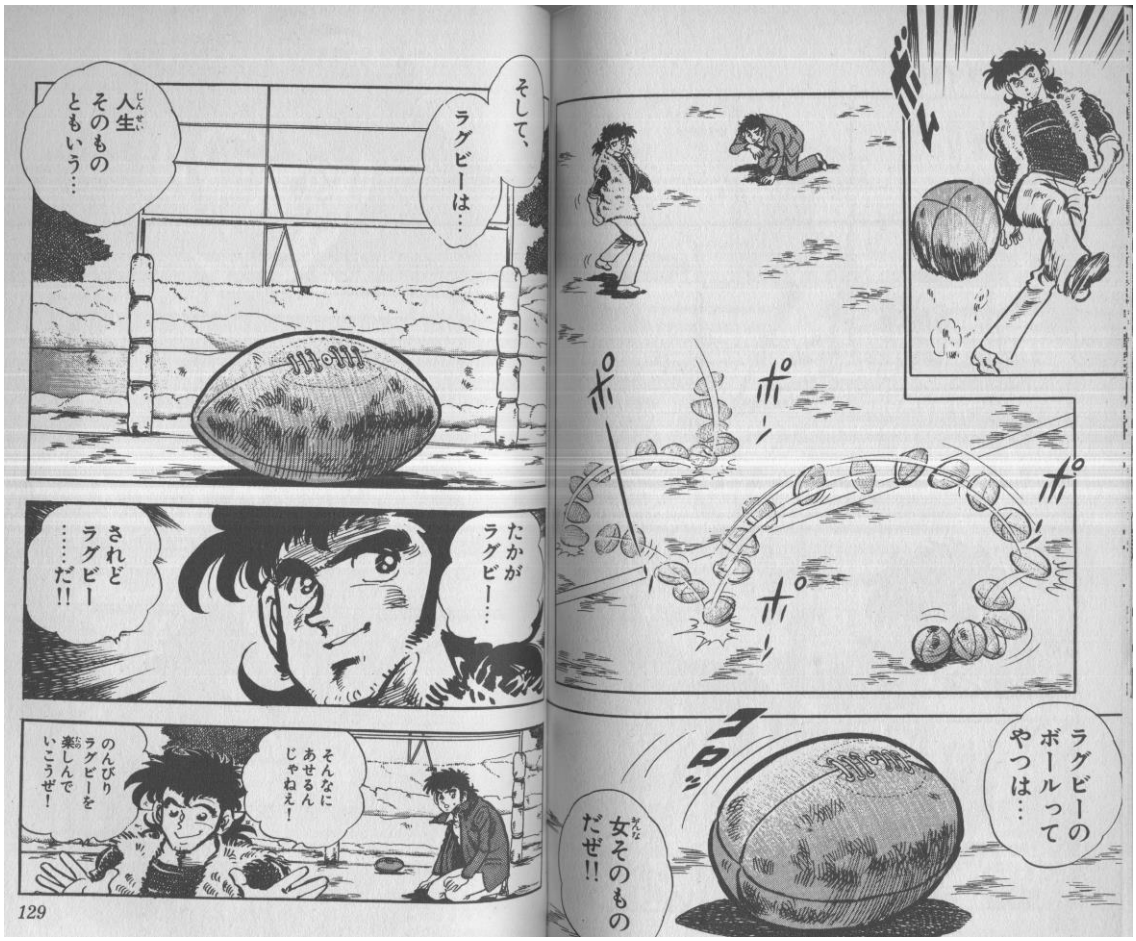
ともかく、冴木兄新監督を迎えた扶桑ラグビー部。だが、この監督、全くやる気をみせない。雪でグラウンドが埋もれてしまったとなれば、練習を中止にしてしまう。唯一叶だけは、コンバージョンゴールの練習をしているが、監督はいちゃもんをつけてきた。だが、監督、見本でもの凄いコンバージョンを蹴って見せた。低空から、凄まじいホップでゴールを決めたのだ。
監督「努力とか、根性とか･･･つまんねえこといってねえで･･･これくらいさりげなくやってもらいてえよなァ･･･」
とニヤリと笑って決めた。やはりタダモノではない。しかし、それではなぜ皆のやる気をそぐように振舞うのか、そこを叶は理解できなかった。

日輪ちゃんは、校長に監督のやる気のなさについて訴えるが、校長は放置プレー。**妹が監督だったときとは大違い**だ。
校長「あの男に全てをまかせた上で、チームがガタガタになったとしても･･･それはうちのチームがそれだけのチームだったということじゃい！」
全幅の信頼である。

翌日、叶は、校内でナンパ活動をしている監督をグラウンドに連れ出した。自分は監督を信用して**土を食ったのに**、まじめに監督をやる気がないなら辞めろというのだ。この言葉を聞いて、**監督は叶に鉄拳を浴びせた**。
男「やる気は十分だぜ、ボウヤ･･･半人前のおめえらに‘男’のラグビーってやつを･･･これからたっぷりとしこんでやるぜ！」
どうやらいままでの行動は、やる気を確かめるためのフェイクだったというのだ。ここまでなら単純なスポ根だが、ここからやや趣きが異なってくる。

監督は、最初に自分でなく妹を扶桑の監督によこした理由を明かした。**惚れた女を口説くのに忙しくて二年かかったというのだ**。唖然とする叶。そして、叶に「女に惚れたことはあるか？」と尋ね、叶が「いや･･･」と答えると、**また鉄拳を浴びせた**。なぜ･･･。
男「男のくせに女に惚れたこともねえ半人前だから･･･ラグビーで死ねたら本望だなんて、偉そうな口をたたけるんだよっ！！高校生のお前は勉強だってしなくちゃいけねえし、命がけで女に惚れるかもしれねえ･･･大人になりゃ仕事をし、家庭を持つことになるだろう･･･お前のラグビーに対する気持ちはよくわかる。**だが、男にとってラグビーが全てなわけはねえ！！**」
ちょっと強引で難しいが、要は「**叶は言葉だけはアツいのだが、それには十分な責任が伴っていない**」ということを言いたいのだろう。

そして、



わかんねえ･･･よくわかんねえよ･･･。**本人的にはうまくまとめたみたいだけどさ･･･**。
まぁ、要は「**ラグビーはスポーツという側面から理解するだけでは足りなくて、そのボールのイレギュラーバウンドが示すように、恋愛や人生と同様に‘思い通りにはいかないもの’という側面からも理解する必要がある**」ということなのだろう（と私は解釈する）。
だから、浩が下半身不随になってしまったのも、このような人生のイレギュラーバウンドの一つであり、そういうことで落ち込んでいるばかりで立ち直れないようではラグビーなどできない･･･と、こういうことであると思う。
ともかく、この一連のやりとりは叶に相当堪えたようだ。監督が去った後も、グラウンドにヒザをつき、うなだれる叶であった。そう、**日本一になって、‘おれたちの大会’まで終えて、浩のケガを通じてラグビーに燃え尽きていた叶だったが、まだラグビーのスタートラインに立ったにすぎないのだ。**

これ以後、叶の人格にも変化が現れた。近寄りがたい雰囲気だった叶だが、やや優しい雰囲気になってきたのだ。一般女性からラブレターを渡されたりしている。
さて一方、鬼と化した監督のエグ練習が始まった。練習は 2 時間だが、一時も休むヒマが

ないのだ。練習は量より質だ！
練習後の叶に、見物人から「トシ！」と声がかかった。
叶「ノブ！」
どうやら、叶の旧友のようだ。最後に会ったとき以来、ヤクザになったことを明かすノブ。
ノブ「テレビでみてたよ･･･カッコいいよな～日本一だもんな～！」
そして、‘親を捨てた’叶と、‘親に捨てられた’自分との、兄弟のように仲の良かった関係を懐かしむノブ。かつて不良仲間だった叶も含め、皆が自分のもとから去っていってしまったことに、寂しそうな様子をみせる。そして、自分にとって‘家族’はヤクザの‘兄貴’だけなんだと、言い聞かせるように言う。殴られても恐喝を命じられても、一番自分をまともに扱ってくれるのは‘兄貴’だけなのだ。
ノブ「兄貴に拾われていなけりゃ、俺も高校くらい行ってたかもな･･･なんとなくお前が気になってさ･･･もう、会うこともねーだろ･･･」
と意味深な様子でノブは立ち去っていった。
翌日の新聞に、叶は愕然とした。暴力団の抗争において、ノブは相手の組長の襲撃に失敗し、射殺されたという記事があったのだ。ノブ、享年 17 歳。
叶「**あの･･･バカヤロ～**」

その日の練習･･･叶は何かにアタるように、ラフプレーを連発。ノブのことが頭から離れないのだ。仲間から、ブーイングを受ける叶。そこへ、見物人の**ふくよかな女性**からチャチャが入った。
女性「そんくらいをラフプレーっち言うとったらラグビーにゃならんぞな！！あんたらそいでん男ねっ！！」
ジョーが「なんだ、あの**金太郎**」と言うと、女性は**キレた**。そこへ冴木兄監督が仲裁に入った。なんとこの女性は嵐子（らんこ）と言い、監督の女房だというのだ。**2 年もかかって口説いたわりにあまり可愛くない**ことに納得いかない叶。だが、きっと何か大きな魅力を備えた人なのだろう。

練習再開。監督夫妻はその様子を見ながら、話し合っている。漫画の打ち切りが決まっているので、**強引なまとめっぷり**に突入する。
冴木「おまえの言うとおりさ。まだまださ、こいつら･･･」
嵐子「高校生のラグビーじゃもん！」
冴木「**ワンオブフィフティーン･･･ラグビーは‘信頼’だということが･･･わかりはじめたところだ！**やがてこいつらも高校を卒業し、大学、社会人とラグビーをやり続けるだろう･･･今の信頼のラグビーに、大学ラグビーでプラスされるものは･･･」
嵐子「それは･･･**‘自立’**･･･たい！！自分にあった練習ば自分で工夫して･･･自分の特技に磨きをかける･･･そして自分自身でラグビーとは何かと考えはじめる･･･」

冴木「社会人ラグビーでプラスされるものは･･･」
嵐子「**‘責任’**･･･たい！！いま、自分が何ばしようとしとっとか、判断しながら行動ばする･･･」
嵐子「つまり、ラグビーの成長も、人間の成長と同じだっちゅうことたいね･･･」
冴木「そう！こいつらは体は一人前だが･･･ラグビーも人間としてもまだまだ未熟だ･･･これからラグビーとともに成長していくんだ！！」
嵐子「あたしも高校、大学、社会人と、10 年以上もラグビーチームのマネージャーをやってきて･･･はっきりといえることだけど、あん子･･･すごかプレイヤーになるわよ！」
と、叶を指す嵐子。
まさに阿吽の呼吸の夫妻だ。

このやりとりに、練習中の叶自身の思いも交差する。
叶「ノブ･･･あの頃俺は校長に拾われ、お前はヤクザに拾われた･･･もし俺が校長に拾われず、ラグビーとも出会えなかったとしたら･･･お･･･おれだってお前と同じように･･･くだらねえくたばり方をしていただろう･･･」
おい･･･**‘くだらねえ’って言っちゃった**よ･･･。まぁ細かいことは気にしない（笑）。
叶「**だが、俺は･･･ラグビーのおかげでこうして生きていられる！！だから俺は･･･生きているかぎりラグビーをやる･･･！！生きるということはラグビーをやるということなんだ！！**」

この回だけで、強引に物語終盤モードに突入してしまったが、作者のラグビー愛が凝縮されている。

漫画『ウォー・クライ』の連載最終回。**舞台は「おれたちの大会」から 8 年後に移っていた。**
国立競技場に、NZ オールブラックス vs 日本代表の試合のキックオフがなされた。**日本代表の SO は叶**。日輪ちゃんは立派に医師になり、メディカル・エンジニアリングの権威となっている（出世早くないですか？）。メディカル・エンジニアリングとは、人工関節、人工臓器などを開発する医療工学のことだ。そして、彼女の尽力により、**浩も松葉杖ながらも自力歩行できるようになり**、二人してこの試合に駆けつけている。

また、この試合には様々な人々の運命がクロスオーバーする。

- いままで教育ママによって何一つ好きなことをやらせてもらえなかった、受験生の息子。本当は、本人はサッカーが大好きで、ブラジル留学したくてたまらないのだ。
- 重い病におかされている恋人を持つ社会人男性。この恋人は叶の大ファンなのだという。そして男性は、職場の上司から別の見合い話を持ちかけられている。恋人自身の「私はいいから、他に健康な人をみつけて」という言葉との間で、苦悩している。
- 銀行の閉店間際に強盗に押し入ろうとしている男性。この男、大学時代途中まで叶と一緒にラグビーをやっていたが、途中で止めてしまった男である。それ以来女に溺れ、バクチに手を出し、サラ金に追われ、ここまで落ちぶれてしまったのだ。

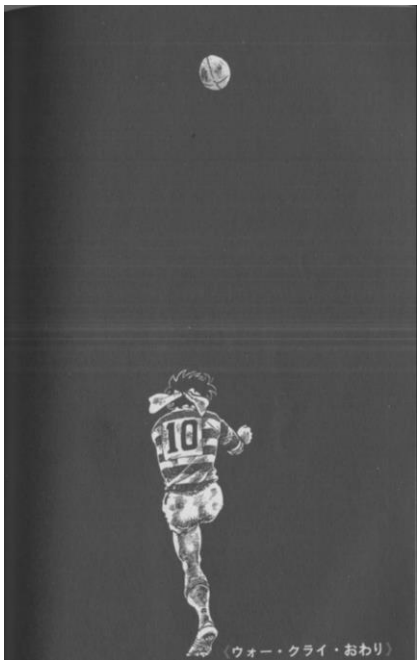
･･･彼ら全員が、それぞれテレビで NZ オールブラックス vs 日本代表の試合を、はからずとも観ているのだ。

代表の試合は進んでいく。**NZ の SO は岡部**だ。やや NZ がリードしているが、日本も後半に入って追撃のトライをあげ、なかなかいい試合である。あの夫妻も観戦に来ている。
冴木「どうでえ！こりゃあいけるぜ！だろォ？嵐子！！」
嵐子「ウンウン。それにしても･･･日本代表に扶桑出身が 8 人も出てるとは･･･！！」
そう、この漫画を読んできた諸君達にとって、この試合の代表メンバーは豪華絢爛そのものである。全員に対して直接の言及があるわけではないが、絵などから判断する限り、扶桑出身の 8 人とは、**1 番 栗林（クリ）・2 番 豪田（ブル）・3 番 天羽衣（ジョー）・4 番 大熊（クマ）・9 番 清水・10 番 叶・11 番 猫田（ネコ）・13 番 伊達**のようである。
そして、彼らも忘れてはいけない。日本代表の **8 番は佐武、12 番は白鷺、14 番は天生**である。先ほどのトライも、伊達→白鷺→天生→猫田とつないで取ったものだ。

僅差で日本が追う展開で、試合はロスタイムへ。まだ逆転可能である。**逆転すれば、日本は史上初の NZ に対する勝利**である。この接戦をみて、観戦しているそれぞれの人間の運命と交差していく。
受験生「日本代表が勝ったら･･･生まれて初めてわがままをさせてもらう！！俺の夢のブラジル行き決行だ！！」

社会人男性「おまえの好きな叶に賭けよう･･･日本代表が勝ったら、部長の縁談は断る･･･どれだけの間一緒に暮らせるかわからないが、お前と結婚しよう･･･！！洋子･･･すまない！俺はこんなふうにしてしか決断できない！」
強盗「試合が終わるのは、ロスタイムからして･･･ちょうど銀行の閉店時間間際になるな･･･ようし、叶･･･もし、おめえらが勝つようなことがあったら･･･俺も銀行強盗なんかやめてもう一度やり直そうじゃねえか！！」

叶達は最後の攻撃をしかける。伊達の仕掛けから、最後は猫田へ･･･トライ！日本 14 - 15NZ で、ラストプレーのコンバージョンゴールを叶が蹴る。
実況「さあ、このゴールキックが試合の勝敗を決します！！」
ラグビーは人生そのもの。多くの運命を背負って･･･



ウォー・クライ、完結。
新監督を迎えて「まさに、これから」ってとこだったのに。叶の飛び蹴りをもっとみたかったのに。
ここに、伝説のラグビー漫画は幕を閉じたのであった。